

## 宮古島沿岸資源調査報告書

1. 期 間 日1961年5月30日至6月7日  
2. 使用船舶 調査試験船 國南丸 15851t 400HP  
3. 従 業 員 (イ) 國南丸乗組員 中村船長以下13人  
(ロ) 研修生 3人  
(ハ) 調査員 技手 当真 英平  
4. 調査要項 (イ) 青ムロアジ調査 (ロ) 鯉科調査  
5. 調査概要

今回の調査は1959年度に続き毎年宮古東岸俗稱「ナレ干瀬」附近へ時期的に来遊する青ムロアジの回遊経路、資源量の調査並に漁法の調査研究主体であつたが、宮古群島は鯉漁業の盛んな地区であり鯉漁業者や地方庁の関係職員と調査日程を打合せた結果、鯉科に乏しい今日は非共試調査を実施して貰い處への要望を受けたりで合せて調査することとした。(イ) 青ムロアジ調査(オ一回目)

5月1日(旧暦5月18日)保良漁協員10余人、地方庁職員数名、國南丸に乗船せしめ例年の漁場「ナレ干瀬」附近にて投錨して日没より再投錨し集魚灯(左舷120V500W5灯、右舷120V500W2灯)を点灯して集魚状況を観察したが、来遊したのは「シバカシヤコ」<sup>1)</sup>と「シイラ」<sup>2)</sup>の小群約50尾程度表面近く底層上未遊したのが確認されただけで青ムロアジの正体は見受けられなかつた。(表面水温25.8°C)

然し乍ら当地は水深30mで其の間から海底近くまで魚群探知機で魚群の映像がオ一回の横に魚群は不明であるが数回に亘りキャッチされている。尙地元の保良漁協員は民間「ナレ干瀬」をバックにして押船で刺舟10余隻を利用して追込式漁法で1日1~2000尾以上の青ムロアジを漁獲している現状である。従つて夜間集魚灯に集つた魚群即ち魚探機の映像物は大方青ムロアジ群であろうと考えられる。

### オ二回目 5月2日

調査の方法は前日同様で漁場を少し沖寄りに移動して集魚状況を観察したが、当地は水深28mを測定、魚探による魚群の映像は一回目より濃密となつてキャッチされているが、浮上する傾向はなく、中層を遊泳し最上昇した時の水深が14m位で集魚網での映像は到底望めなかつた。該魚群は灯火に反応高付きがなく約1分~2分の間隙で逸散したり集つたりしている状況であつた。尙夜半過ぎると魚探への反応は全然見受けられなかつた。(前日も同様)表面水温25.0°C

### オ三回目 6月3日

ツブツ干瀬の南方25度の地点(14°26'30"N; 108°13'0"218'E) 当地は「ナレ干瀬」への青ムロアジの回遊経路を推察して調査した訳だが鯉科が少し集つた丈で他に何を見べきものはなかつた。

(四) 鯉餌料調査

5月4日伊良部村を良浜漁協員と他間島漁協員各10余人づつ乗船 せし平良港沖合の東経125°14'8" 北緯24°51.4' Nの地点水深29mで投錨して集魚試験実施(使用電力は青ムロアソ調査と同じ)

日没後から集魚灯を点灯し18時40分頃から灯火の効力が見られ20時40分から集魚し始め21時に大きい群となり真円を描いて灯火に落付いた。魚種はシャビナゴ7の幼魚と判明し、数量は500-600尾程度の群と推察した。其の結果宮古の鯉魚業者は、これまで餌料の採捕は裸潜りに依存していたが、今度の試験で集魚灯を利用するの漁法への関心が高まった様である。尚樽受網の操作方法も合わせて指導に当つた。

5. 魚体測定

(1) 鯉餌料

平良港沖合の鯉餌料は集魚状況は良好であつたが、魚体は小さく、体長30mm、体高4.0mm以下の幼魚であつた。

青ムロアソ漁場附近の鯉餌料(パナレ級)

魚 種	体 長	体 高	魚 種	体 長	体 高	魚 種	体 高	体 長
バカシヤコ	38mm	7mm	バカシヤコ	44mm	12mm	シイラ	42.1mm	8.1mm
#	39	7.5	#	40	7	#	43	8.0
#	39	7	#	40	7	#	41.1	8
#	39	7.5	#	36.5	6.5	#	44.8	8.1
#	39	7	#	38	6.5	#	44.3	8
#	40.5	8	シイラ	44	8.4	#	40.2	7
#	37	7	#	40.2	8.2	#	45.1	8
#	39	7.2	#	44.4	8	#	45.8	7.5
#	38	7	#	44.5	8.8	#	39.2	7.8
#	41	7.1	#	41.7	8	#	45.2	8.9

4) 地元漁業部の漁獲した青ムコアジ

魚種	体長	体高	性別	熟度	胃内容物
青ムコアジ	315 cm	73 cm	♀	B	なし
♀	315	68	♂	#	#
♀	270	57	♀	#	#
♀	310	65	♂	#	#
♀	324	71	♂	#	#
♀	284	60	♀	#	#
♀	317	70	♀	#	#
♀	280	62	♀	#	#
♀	287	61	♀	#	#
♀	305	66	♂	#	#
♀	270	60	♀	#	#
♀	287	60	♀	#	#
♀	275	58	♀	#	#
♀	287	64	♀	#	#
♀	285	63	♀	#	#
♀	273	58	♂	#	#
♀	270	58	♂	#	#

7 漁場図及魚探の映像図

別紙(添付図の通り)

8 気象 海況

別表の通り

月	時	気 象						観 測 位 置	
		天 候		気 象		海 況			
		風 向	風 力	気 圧	波 浪	水 色	水 深		
六月	18	0	SSW	275	2	258	3	30m	バナレニ瀬 Lat 24°44'N Long 125°28'E
	30	9	II	1003.5	1	2538	155m	R	
二	20	0	S/W	27	3	260	3	28m	バナレ干瀬 Lat 24°44'N Long 125°28'7E
	00	9	II	1008	2	2481	16m	R	
三	18	B.O	SSW	283	2	261		23m	ツツツ干瀬 W.25 西 Lat 24°50'S N Long 125°20'E
	50	3	II	1006.5	2	2505	16m	R	
四	20	B.O	SSR	27	1	275		20m	平良港沖合 Lat 24°51'N Long 125°44'E
	40	4	I	1008	1	2516		R	

9 図内丸乗白者

別紙名簿の通り

## 10 所 感

### (4) 青ムロアジの回遊並魚法

地元漁者の漁獲物調査結果から観察すれば、該魚群は餌餌せず空腹状態であり其の上層域共に完熟しているので、索餌回遊とは考えられず産卵の為に来遊しているものと推量される。魚群は其の性質上産卵期に入れば灯火で誘致し群い様で待受網での漁法は望め難いものと思つた。即ち灯火に集まる事は確認されたが、終始着きがなく前述の通り表面近くを浮上する傾向がない。然し乍ら産卵後になれば其の限りでないと思ひ、果して産卵すれば間もなく移動するものか或はしばらくの間停滞するのか不明の点があり、今後引續いて調査研究する必要性を感じた。

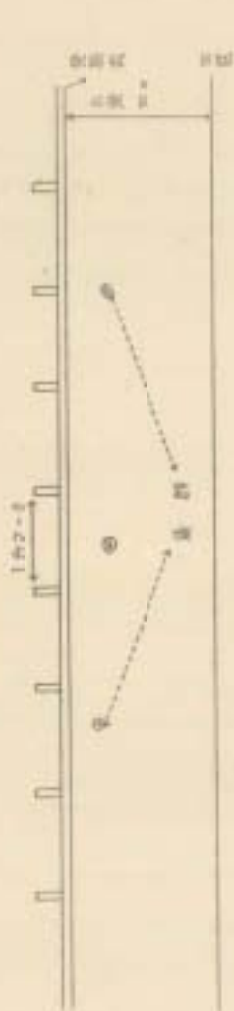
### (5) 鱈 餌 料

宮古群島の鱈餌料の棲息場所即ち餌場を豊富に抱えているにも拘わらず餌料の確保には難色を見せている時期もある様態だが此の事については獲船が増した原因もあるが、昼間獲付の餌丈を対照しているからでもあらう。

今回の試験は多数の遊漁者が従来し、千良港沖合で大量の「ヤビナゴ」が集魚し又灯火に集着くまで実際に見て貰つたので、火光利用への関心が高まつたものと見ゆ。依つて今後は是非共集魚灯を利用して夜間の採捕も勸業して餌料難を解決して頂き度いものと望む所である。

魚群探知機でキャッチしし魚群の映像図 其の一

6月1日  
ST. 110



ST. 1100

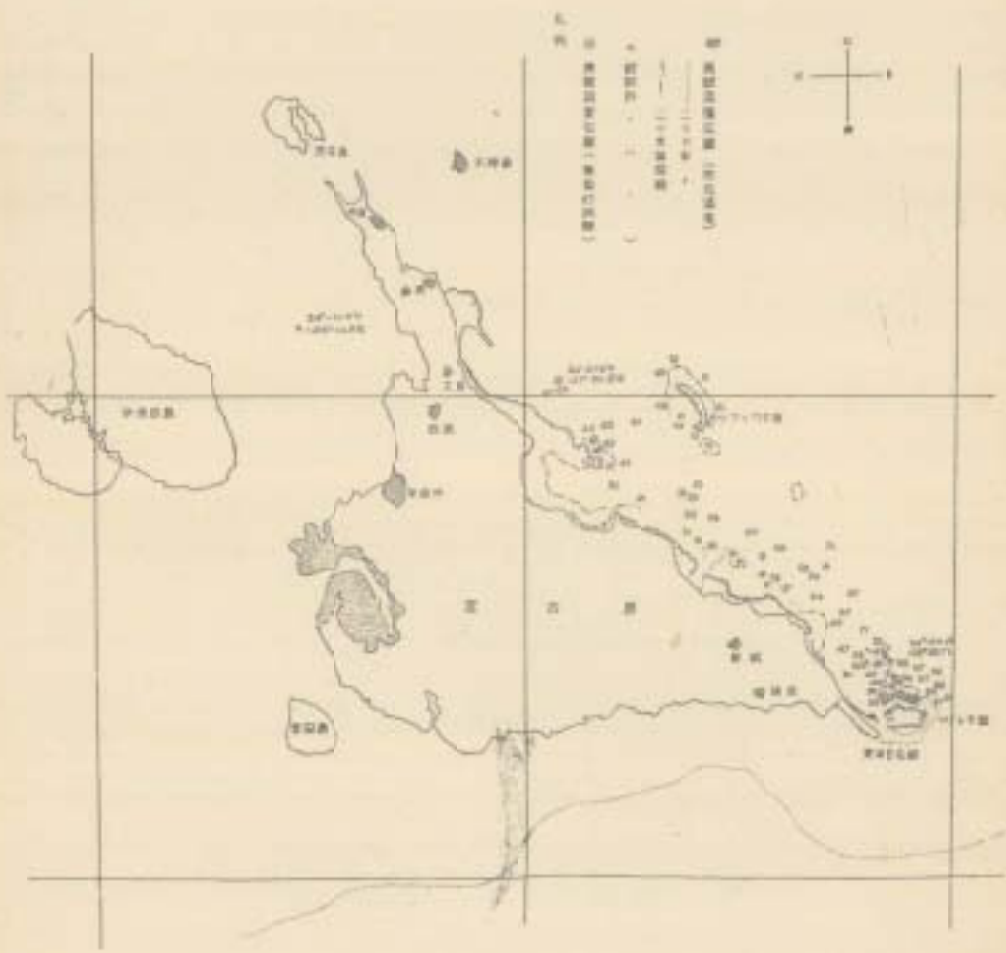


ST. 1050



魚群探知機でキャッチした魚像図 第三









宮	國	勝	一	伊良部謙隆	振揚丸船主
下	越		男	"	隆祥丸代表
池	前		全	"	才一丹山丸代表
米	岡		登	"	未問船代表
下	地		觀	伊良部謙協水産技術員	

振揚丸乗組員 45人

延 總 計 75人